

コラム1

旧ソ連地域の統合

西山美久

1985年に共産党トップに就任したミハイル・ゴルバチョフは、政治経済的に閉塞感を強めるソ連の刷新を目指しペレストロイカやグラスノスチを断行した。こうした試みは国内外で注目されたが、次第に彼自身の立場を危くする。各共和国は独自利害を主張して連邦中央を批判する姿勢に転じ、ついには独立を宣言するようになる。他方ゴルバチョフはソ連の維持を模索するという、相対するベクトルが存在していた。そうした中、1991年12月6日、ロシア・ウクライナ・ベラルーシの三首脳は「独立国家共同体（Commonwealth of Independent States）」（以下、CISと略記する）創設を宣言し、最終的にバルト三国を除く12ヶ国で構成されることになった。CIS創設で連邦維持は不可能と見たゴルバチョフは1991年12月下旬、辞任を表明。70余年にも及ぶソヴィエトの歴史に終止符が打たれた。

ここである疑問が浮上する。なぜ各国は独立を望みながら、一つに糾合するという選択肢を採択し、CISを結成したのであろうか。この問いに答えるには、ソ連の仕組みを考慮する必要がある。というのは、ソ連は様々な問題を抱えながらも政治経済的に統合されていたため、各国は連邦全土に張り巡らされた経済ネットワークや交通インフラ、人の移動といった課題を解決しなければならなかったのである。1993年に採択されたCIS憲章には「単一経済圏の確保」「加盟国市民の自由な移動」などが規定されており、各国の意図が端的に示されている。

しかし加盟国間には、歴史・文化・言語などの差異のみならず、外交力や経済力といった面でも格差があり、各国が自国の思惑や利害を表面に噴出させるのは当然である。そのため、CISはEUのような統合体ではなく、むしろ緩やかな国際組織とされている。例えば、豊富な天然資源を有するトルクメニスタンは独自の道を歩み出し、1995年には国連で永世中立国として承認された。1999年にはロシア・ベラルーシ両国が連合国家の創設

を掲げ、翌年にはその2ヶ国にカザフスタン・タジキスタン・キルギスを加えた「ユーラシア経済共同体」が結成された。さらに2006年にはそれら5ヶ国にアルメニアを加えた「集団安全保障条約機構」が創設され、域内多様化が進んだ。

このように地域大国ロシアを中心とした再編が進みながら、他方でロシアがCIS内で優位に立つ状況に必ずしも好印象を持たないメンバーも存在する。上記のようにロシアが統合強化に乗り出すと、他国は覇権主義の台頭として警戒感を露わにする。その証左として、グルジア（現ジョージア）・ウクライナ・アルメニア・モルドヴァの4ヶ国は1997年、アメリカの支援のもと「GUAM（加盟国の頭文字）」を結成した。1999年にはウズベキスタンを加えた「GUUAM」となったが、2005年に同国が脱退したことで再び「GUAM」となるなど、組織の足並みは揃わなかった。ところが、2006年にウクライナ主導で「民主主義と経済の発展の機構 GUAM」へと再編され、反露的な性格をより一層強くしたとされる。

これには2003年～2004年にグルジアやウクライナで生じた政権交代が関係している。両国では選挙での不正を発端とする大衆運動が全国規模で展開され、新政権が誕生した。それぞれ「バラ革命」「オレンジ革命」と呼ばれ、「カラー革命」と総称された。アメリカのブッシュ政権（当時）は一連の政変を「民主化革命」と評し、両国のNATO加盟を後押しした。他方ロシアは、このような試みをロシア孤立化政策の一環とみなした。こうして、旧ソ連空間の再編をめぐって米露関係は次第に冷却化し、「新冷戦」の始まりとさえ主張された。2008年にはロシア・グルジア紛争が勃発し、グルジアはCISから脱退するに至った。また2014年にロシアがクリミアを「併合」したことで、ウクライナも脱退を示唆するなど、CISの分散が進んでいるかのように思える。

とはいえ、統合に向けた新たな動きが無いわけではない。例えば、ロシア・ベラルーシ・カザフスタンからなる「関税同盟」が2010年1月に発足し、非加盟国に対する関税を加盟国間で統一することになった。2011年には、ロシアのプーチン氏が旧ソ連地域の多面的な統合を進める「ユーラ

シア連合」構想を『イズヴェスチャ』紙に発表し、世界を驚かせた。欧米諸国は旧ソ連の復活だと批判しているが、プーチン自身は「旧ソ連の復活を意味しない」と述べている。また2015年1月には、ロシア・カザフスタン・ベラルーシ・アルメニアを加盟国とする「ユーラシア経済連合」が発足し、経済を基盤とした統合が進められているようだ。

しかしながら、統合を進める上でいくつかの課題もある。第一に、アイデンティティをめぐる問題である。周知のように、国民国家の限界はしばしば指摘されているが、旧ソ連地域に限ってみると、各国のアイデンティティはナショナルな領域に留まっており、統合体を形成し得る「共通の意識」の醸成には至っていない。第二に、大国ロシアへの猜疑心である。ロシアは国益中心主義を前面に押し出しており（資源外交や非承認国家への支援など）、そうした姿勢に疑念を抱く国が無いわけではない。第三に、外部アクターの関与である。例えば、NATOの東方拡大、アメリカや一部NGOによる反露政権への支援などが該当する。これらのアクターがCIS諸国との関係強化を図り、ロシアと地政学的な駆け引きを繰り返すことで、事態を複雑化させる場合もある。

ともあれ、旧ソ連地域における統合と拡散あるいは求心力と遠心力は興味深く、今後も継続的に観察されるべきテーマだと言えよう。